

武蔵野日曜集会

汝の信仰

――マルコ伝第10章46～52節――

1965年2月28日

小池辰雄

生命賭けの瞬間 ダビデの子よ うわぎを脱ぎ捨て躍り上りて 一回限り 汝の信仰 「私」
がすっかり抜けている 我を憫みたまえ 証者としての実存 汝のものとしてください 賜り
たる信心 キリストと一つとせられる

【マルコ10・46～52】

46 斯て彼らエリコに到る。イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリ
コを出でたもう時、テマイの子バルテマイという盲目の乞食、路の傍に坐し
おりしが、47 ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言う『ダビデの子イエ
スよ、我を憫みたまえ』48 多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、増々
叫びて『ダビデの子よ、我を憫みたまえ』と言う。49 イエス立ち止まりて『か
れを呼べ』と言い給えば、人々盲人を呼びて言う『心安かれ、起て、なんじ
を呼びたもう』50 盲人うわぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、
51 イエス答えて言い給う『わが汝に何を為さんことを望むか』盲人いう『わ
が師よ、見えんことなり』52 イエス彼に『ゆけ、汝の信仰なんじを救えり』
と言い給えば、直ちに眼を見ることが得、イエスに従いて途を往けり。

●生命賭けの瞬間

題して、「汝の信仰」と致しました。ザアカイの『桑の樹によじ登る』（曠愛新書第2号）
もやはりエリコの途上のことでした。これもそうです。マタイ伝に似たような記事があり
ます。

46 斯て彼らエリコに到る。イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリ
コを出でたもう時、テマイの子バルテマイという盲目の乞食、路の傍に坐し
おりしが、

「バルテマイ」の「バル」というのは「子ども」という字です。はつきりと「テマイの子」と、
盲人の固有名詞的な存在がここに特別に記されてある。路のかたわらに坐つて、もの乞い
をしていたようなわけでしょう。ナザレのイエスのことはもう聞き及んでいたものではな
ら、イエスさまがやっていらつしやる。それで、千載一遇というわけです。このでつくわし。



この瞬間を逃したならば、もう再び来ないその瞬間です。

時々申しますが、人生には非常に大事な瞬間がある。

「瞬間を本当に捕まえる人、瞬間を本当に生きる人、それが本当の人間である」

というような言葉も、ゲーテの『ファウスト』の中にありますが。ゲーテ自身が、

「ちやうど、賭けをする人がカルタに全財産を賭けるような賭けかたをする。その

ように自分も瞬間に対して全生命を賭けていく。」

というようなことをエッカーマンに語っている。博打ばくちみたいですね。それが即ち、生命賭

けという言葉です。

この盲人も生命賭けの瞬間です。イエスは再びそこを通らない。もう十字架への途みちです。から。これを通り過ぎてしまったら、もうどうにもならん。彼は叫んでやまないわけです。

●ダビデの子よ

47 ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言う『ダビデの子イエスよ、我を
憫あわれみたまえ』

「ダビデの子」というのは、マタイ伝の一番先に出ているように、

「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系譜」

とある。信仰の父アブラハムの裔すえであり、ダビデ即ち「メシヤ」「王者」の裔。この世に理想的な王国をもたらす者とユダヤ人たちが思っていたところの、メシヤのダビデをもうひとつ上回るところの本当の王者ということ。しかし、その言葉はローマの官憲に対して非常に危険な言葉でして、ローマに対して政治的な敵となる。そういう「ダビデの子」というような表現をされては困る。それで、他の人たちがその叫びを止めようとしたわけです。

この盲人は「アブラハムの子」と言わないで

「ダビデの子」

と言っている。「メシヤ」です。もちろん、この盲人のキリストに対する判断の仕方には間違いがあつたにせよ、とにかく、神の政まつりごとを地上に行うメシヤとして叫んだわけです。むしろこの時に、「アブラハムの子」と言った方がこの全体のお話には適切な言葉かも知れませんが。しかし、盲人は「ダビデの子よ」と言った。

「メシヤよ」

ということです。しかし、イエスは自分のことを「ダビデの子」とは仰らない。最後には、全然次元の違った意味で、

「本当の王者である、メシヤである」

ということを宣言されました。けれども、その時が来るまでは、イエスは

「人の子」

と言っておられる。これは隠された言葉ですが、本当はメシヤということです。また、本



当の贖い主ということです。

●うわぎを脱ぎ捨て躍り上りて

48 多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、増々叫びて『ダビデの子よ、我を憫みたまえ』と言う。49 イエス立ち止まりて『かれを呼べ』と言い給えば、もう、声を聞けば、その声においてイエスは何が願われているか、また、どういう質の願いをしているか、その全存在が読めるわけです。そこで、立ち止まって、「彼を呼べ」と言いました。

人々盲人を呼びて言う『心安かれ、起て、なんじを呼びたもう』

「安心しろ、心配するな。立て、なんじを呼びたもう」と。

50 盲人うわぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、51 イエス答えて言い給う『わが汝に何を為さんことを望むか』

もちろん、イエスの許に――これはまだ盲ですから自分で歩いたわけではないでしょう――何か助けによって行つただろうと思いますが。とにかく、この盲人は

「上衣を脱ぎ捨てて躍りあがつて」

イエスの許に來たという。この前お話した時も、私はこの一句に重点を置きました。先程読まれた使徒行伝3章のところにも、

「1 昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、2 ここに生れながらの跛者かかれて來る。宮に入る人より施濟を乞うために日々宮の美麗という門に置かるるなり。3 ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施濟を乞いたれば、4 ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。

5 かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、6 ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。7 すなわち右の手を執りて起こしに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、8 躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讚美しつつ彼らと共に宮に入れり。」(使徒行伝3:1-8)

とある。これは癒されたあとで、そのような非常に欣喜雀躍した光景ですが、この場合はまだ治っていない。眼が開いていないが、

「うわぎを脱ぎ捨て、躍りあがつて」

という。キリストが自分を呼んでいる。盲人は御名を呼んでいる。称名です。そしたら、イエスはこれを聞いてくださる。もう、バルテマイはうれしくてたまらない。そこで、上衣を脱ぎ捨てて躍りあがつた。信仰の世界はこれです。即ち、

「上衣を脱ぎ捨てて躍りあがりて」

というのは、全身的な行です。全身的な姿です。



聖書研究とか、いわゆる今までの無教会のありかたはダメなんです。なるほど、微に入り細に穿って聖書の研究は学問的にはずいぶん進んでいる。ある意味において、世界的水準までいつている人があります。けれども、それで聖書が本当に読めているか。それは全然、別問題です。ずいぶん乱暴なことを言うけれども、そうなんです。

●一回限り

私たちはこの福音書を通してまた使徒行伝を通して、キリストに、聖霊の現実につつかる。福音書はもう、神・聖霊・キリストが一つになっているところに展開しているんですから。このキリストにでつくわすということ。このバルテマイはここでイエスをつかみそこなったら、お終いです。

ところが、我々、現代のキリスト者は、聖書というのが出来ていて、福音書においてキリストにでつくわせる。いつ何ときでもでつくわせる。いつ何ときでもでつくわせるものだから、あまり恵みがよすぎるものだから、それで聖書がつい棚に上がってしまったて、ちつとも読まない。また、読んでも、いつでもでつくわせるものだから、いい加減な読み方をしている。だから、聖書があるのは幸いか何か分からない。

一遍しか会えないというような、

「生涯に一遍しか会えませんよ」

というようなことになってきたら、

「さあ、その瞬間はいつだろうか」

なんてなわけで、非常に求め待つて祈っているわけです。そして、それを捕まえたらもう、このバルテマイと同じように、

「汝、我を救わずば、汝を離れない」

というようになるわけです。

私たちは、いつでもでつくわせる。それでは、いい加減でいいか。いい加減に百回でつくわしてもダメです。そこで、我々の集会そのものは、いつも私は

「一回限りだ」

と申し上げるのは、そのわけです。言わないけれども、本質的には、

「一回限りで解散。その次の週は、集会があるかないか分からんぞ」

ということ。そういう一回限りでもって、非連続の連続で行くことが本当の出会いである。聖書も、今日読むときには、もう明日読むときは違った、或る、今日でなければ今でなければ読めないという、そういう読み方をしていく。決して、繰り返しではない。一回ごとに、他の回で同じところを読んでも違う。その時に入ってきた生命というものはその一回限りのものだという、気合でもってこれにぶつかって行くときに――

「点滴、石をも穿つ」



というが――穿^{うが}たれる石のごとくに、その御言に穿たれていくわけです。

集会ごとにその人は深められていく。聖書を読むごとに、その人はキリストに捉えられていく。絶対に後退を知らない。人間だから、後退もしますよ。けれども、躓いたり転んだり滑ったりひっくり返ったりしても、常にそのマイナスが逆にプラスに変質されて進んで行くような進み方です。それが本当に聖書にぶつかっているぶつかり方であり、キリストに出会う出会いです。それが即ち、瞬間に全生命を賭けて、全身的である。全存在的である。

信仰は思惟の世界ではない。「我思う」なんていう世界ではない。

「我思う故に我あり」

なんていうのは、これはシュバイツァーも言っているとおり、それでもつて近代人は非常なマイナスになってしまった。ある意味においてはもちろんプラスをしましたよ。けれども、魂の存在の世界においてはマイナスになる。だから、ゲーテなんていう人も

「行為だ」

と言う。キルケゴールやニーチェが当時の思想に対して「ナイン（否）」と言ったのは、この「実存」の世界です。「エクジステイレン」（実存する）、

「自分の身を投じてそこに在るという在り方だ」

と。うべなるかなと思うわけです。昔の坊さんたちの世界も、信仰というけれども、みなそういったところの、本当に全身的な行為です。ただ「行為」といっても、この「行」というのは「信仰と行為」という、そういった分析的な行為ではない。

●汝の信仰

そういった全身的な動き、これがこのバルテマイの

「うわぎを脱ぎ捨てて躍りあがりて」

という、この姿に信仰が現象している。これが信仰なんです。これが信なんです。「汝の信仰」と、あとでキリストが言われたときのその内容は実に、「うわぎを脱ぎ捨てて躍りあがりて」という、この瞬間にかかっている。

「それがお前の信仰だ」

と。完全にキリストに信頼している。

「汝の信仰」の「汝の」というのは主語的であると同時に、目的語的である。即ち、

「汝（キリスト）を信する」

ことです、この「汝の信仰」は。「汝、キリストを信じる」こと。信仰の世界は決して三人称ではない。いつも二人称、対称です――自称（一人称）、対称（二人称）、他称（三人称）という――他称という三人称ではなくて、単なる「自」でもなくて、「汝」ということ。キリストも



「汝の信仰」

と言われた。「汝を信仰、信ずる」こと。「自分を信ずる」信仰ではない。自分の信仰を云々する信仰ではない。

「私の信仰はどのようなものか」

なんていう、そういうことではない。これがしょっちゅう、「信仰」という言葉が躓きになっっているわけです。

私は「自分の信仰」なんていうものを当てにされたり、それを問題にされたら、もう私はキリスト教は御免こうむります。ダメですわ、私みたいな人間は。私は、主さまの——

「あなた（神さま）が一切である」

という——それを受けとつて、「汝（キリスト）の信」を受けとつて、この信がこちらにやってくるときに、初めて言えるところの信の世界です。それには、あるがままの、分裂のままでの、頑くなのままの、デタラメのままの、汚れたるままの、そのままの我というものをそこに、何の虚飾もなくそのままぶちまけて投げ入れる。これが

「上衣を脱ぎ捨てて躍りあがりて」

ということなんです。全生命的、全存在的であり、全身的です。

皆さん、こういう劇的な場面に今——これはドラマですからね——そのドラマの中に自分が即ちこの盲人となつてキリストにぶつかっていく。私たち自身が盲人ですよ。魂の眼がみんな曇つて霞んでしまっている。パウロは

「俺こそは見えている」

と思つていた。ところが、パウロはちつとも見えていない。そこで、とうとうキリストの光に撃たれてしまつて、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と。初めて、彼はあのダマスコ途上で眼を開かれた。開眼した。

「眼が開いていると思うものは盲で、眼が閉じていると思つている者が実は開いていた」

と、キリストがヨハネ伝9章で、盲人の眼を開かれたときに、そういうことを言われた。本当に開眼した。

●「私」がすっかり抜けている

「我を憫みたまえ」

と。これは向こうの教会でも、しょっちゅうこれを皆に言わせている。みんな教会員に、「我を憫みたまえ」とラテン語で。ルター教会でもそんなことをやっている。

「我を憫みたまえ」という。我々は、これはもう法然、親鸞が徹底的に語つてるところです。

「人間の側にこれは信仰と思うような信仰すらもない。また、自分の罪を、罪ばかり



りをただ問題にしている、それでもダメだ。自分の信仰を云々して、善人が善を数えることも、悪人が悪を数えることも同じことだ。どっちもダメだ」

なんてなことを言っている。もはやそんな善悪ではないと。相対的な善でも、相対的な悪でもない。もうそれ事態が行きつまりの存在です。この三次元の世界からどうしても出られない。近頃は「ミステリーゾーン」なんて妙な次元を超えたような映画がある。ところが、本当の次元、本当の現実というものは、我々が生きているその相対的現実の中に貫いて、浸透しているところの或る世界です。

そこですよ、すべてね。芸術の世界でも、或は剣道の剣の道でもそうです。こないだ私はテレビで「柳生十兵衛」を見ていたけれども、あれは素晴らしいね。「三匹の侍」なんというのなかなか面白い。日本一の空手のやつが出てきたり。すべてそれは道です。あの剣道の世界を見ると、外国のフェンシングなんてのはもはや問題ではない。さすがに剣道です。日本の剣の道は結局、極まると無剣になるわけです。剣は持っているけれども、剣なんかありません。無剣の世界です。無剣の世界だから、本当に太刀を抜かないで、刀の束に手をかけているだけ。向こうは大上段に構えてくるけれども、大上段に構えたやつが参ってしまう。こっちはまだ抜かないのに。即ち、それはもう最後の境地ですよ。剣は抜く必要はない。刀の束に手をかけてるだけで、相手はどんなにいきり立っていても、一步と二歩と逃げてしまう。脂汗をかいて、そして、

「参ったー」

と言う。そこですよ。それは本当に、剣をもう超越している世界です。

どの道にしても、みんな最後は、そういう「私」がすっかり抜けているところ。私の剣は世の乱れを平和にするための剣である。自分の身をただ修養するための剣ではない。世に平和をもたらせる剣で、みだりに抜く剣ではないというわけだ。弓の世界もそのとおりです。最後はもう、的と自分の魂とは一つですから、矢を発しなくても、ちゃんと当たってしまふ。

●我を憫みたまえ

自己の罪をただ自ら罪といって問題にしているうちはまだ——それは始めは大事ですよ、そのことは——けれども、もうそれから抜けてしまつて、

「もうそんな自分なんていうものをもはや問題にするにも当たらないところの行き詰まりでございます」

というわけだ。問題にするのはもう、このキリストという神の現象体だけです。この現象体の中に本当に身を投げ入れる。この

「我を憫みたまえ」

というこの「我」というやつは、



「私のこういうところを哀れんでください」

なんていうことではない。我そのものがもう、憫まなければどうにもならんどん底の存在である。

この場合、バルテマイは盲であつたけれども、私たちはそれぞれみんな「我を憫みたまえ」で、どうにもならん。どうにかなる方は、どうぞ、もう福音はいいですから、他へいらっしやつて、何とでもなさつていただきたい。

「私はどうにもならん」

という方だけが、この集会でもつて、本当に今度は自在の世界に入る。そのために、皆さん、来ているんですよ。いても立つても、上衣を脱ぎ捨てて躍りあがらざるを得ないような世界ではないですか。もう、ざるを得ないんです。このキリストにぶつかつたら、上衣を脱ぎ捨てて躍りあがらざるを得ない。それだけの全身的な向かいというものが、この太陽に照破される。

「突破」

ということは、神さまが、キリストが私たちを突破してくださる。自分で突破するのではない。突破せんとする悲願を与えてくださる。悲願は大事だが、それは上からの力に自分をぶちまけるところに、突破がくる。

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。叩けよ、さらば、

開かれん」

というのは、みな受け身です。キリストが

「私が開くぞ。私が与えるぞ。私がお前を見いだしてやるぞ」

と。この「上衣を脱ぎ捨てて躍りあがりて」というこの一句に、私たちは、

「ああそうだ、自分はもうこの他にない。上衣を脱ぎ捨てて躍りあがらざるを得ない」

と、そのようにしてキリストに照破され、突破される。

そうしたら、イエスの力が入ってくる。その人の眼が本当に驚くべきキリストの生命に光ってきた。その人の心に、その人の腕に、もの凄い力が出てくる。その人の頭脳にも本当の知恵が働きます。何にでもいい。その人を通して、神さまが栄光を現そうとなさるところの事態です。

●証者としての実存

別に、今のキリスト教界を批判するわけではないけれども、牧師さんたちが本当に聖霊の体験をしているか、本当に聖霊をいただいているか。結局、問題は、

「御霊における一つ」

ということですよ。



「賜物はさまざまだが、ただ一つの御霊、これだけが本当にお互いに和をもたらしめるものである」

とパウロが言っている。エペソ書2章13節から、

「¹³されど前に遠かりし汝ら今キリスト・イエスに在りて、キリストの血によりて近づくことを得たり。¹⁴ 彼は我らの平和にして己が肉により、様々の^{いましめ}誠命の規より成る律法を廃して二つのものを一つとなし、^{うらみ}怨なる隔の中籬を^{こぼ}毀ち給えり。これは二つのものを己に於て一つの新しき人に造りて平和をなし、^{うらみ}十字架によりて怨を滅ぼし、また之によりて二つのものを一つの^{からだ}体となして神と和ら^{やわ}がしめん為なり。¹⁷ かつ来りて、遠かりし汝等にも平和を宣べ、近きものにも平和を宣べ給えり。¹⁸ そはキリストによりて我ら二つのもの一

つ御霊にありて父に近づくことを得たればなり。」(エペソ2・13～18)

いわゆるユダヤ人と異邦人との間の「^{へだて}隔の中籬」がこれによつてとられた。

今のキリスト教界に欠けている二つのものがある。それは本当に自分が証人となるということ。使徒たちはみな証人であつた。さきほどのペテロも証人です。いわゆる説教ではない。宣教のための宣教ではない。証人であるということはどこまでも、栄光を神に帰すること、我々クリスチャンは、自分がどうのこうのなんて、そんなことではない。神の栄光を現し、神に栄光を帰することが本当の証人である。そのことにおいて、現代キリスト教界はどうであるか。

パウロの書簡が、ローマ書がどんなに素晴らしくても、彼の実存そのものは、証者としての実存そのものはローマ書以上である。その証者としての証しがなかったならば、どんな神学的なことが言えようと、聖書解釈ができましようとも、それは空しい。

だから、私が申し上げているとおり、告白である。証者は告白するのであつて、説教するのではない。キリストのこの恵みに与かつたならば、これを通して本当に証しする。私もまだまだである。これからです。私も遅まきながら人生の後半にはいつて、これからとにかく本当にいいよ証者でありたい。毎日が――もはや「毎日が」ということは「ねばならない」世界ではない――毎日が、どこの道を歩こうが、何をしていようが、その在り方の奥に証者としての自覚ならざるところの自覚があらわれている。そうでなかったら、一切は空しいということをしみじみと思う。

●汝のものとしてください

私は今、家を建てつつあるけれども、どうでもいいんですよ、家なんか。問題は、私自身が神の宮となることです。うちは家族が多いものだから、仕方なしに建てたことになつたけれども、私はちつともうれしくも何ともない。どうでもいいんですよ、そんなことは。私自身が神の宮となつて、キリストを宿しているところの家でなかったならば、すべての



ことは空しい。

キリストは活ける神殿であるから、

「三日で建つぞ」

と言われた。本当にそのようにキリストは三日目に不滅の生命をもつて甦ってこられた。我々もまたそういった角度で生きだしたらば、毎日毎日が本当に楽しい。そして、力にあふれてくる。神さまの栄光が、キリストがそこにおいて証しされる。

「我を見よ」

とペテロが言った。あのお話のごとく、もはや、その「我」は我ではない。

「汝の信仰」という、その汝の信仰がキリストの身証しんしやう体となる。皆さん、いつも申し上げているとおり、身をもつて証しする身証しんしやうです。一日を本当に身証者として生きるならば永遠者です。百年いい加減な生き方をしてもその人は滅びるが、一日身証者として生きる人は滅びない。

「我を憫あわれみ給え」

というのは、この我を惜しんで憫むのではない。そんな女々めめしいような——「女々しい」という言葉は女の人には悪いかもしれないけれども——そんなようなことではない。

「このどうにもならないやつを本当にあなたのものとしてください」

ということです。「我を憫み給え」ということは、

「汝のものとしてください」

ということ、逆に私たちは、

「ここにおいてあなたが現れてください。あなたのものとしてください」

と。せつかく、神さまに造られた、全世界とも代えることのできない存在である。それを、

「我は罪びかしらとの首」

とパウロが言いましたが、しかし、その「罪びとの首」と言ったパウロは本当に今度は、神の栄光体にされた。

テモテ前書1章15節に、

「15『キリスト・イエス 罪人つみびとを救わんために世に來り給えり』とは、信きたずべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中にて我は首かしらなり。16然るに我が憐憫あわれみを蒙りしは、キリスト・イエス 我を首に寛容をことごとく顕し、この後、かれを信じて永遠の生命を受けんとする者の模範となし給わん為なり。」(テモテ

前1・15・16)

「キリストの憫みをこうむりて」ということです。

●賜りたる信心

亀井(亀井勝一郎 1907～1966)さんがこの頃書いた本で、『中世の生死と宗教観』



という本はなかなか面白い本です。仏教の方のことが書いてある。

「一番、宗教の世界で信仰にとって最大の敵は、信仰する者の同志の内部にある。

また、自己のうちにある」

と書いてある。いわゆる宗教争い、宗派争いです。何々主義、何々宗派。これが一番の癌であるようなことを書いていますが、正にその通りです。

「相手を赦す」

ということは、これは御霊が来なければできないんです。相手を赦し包むということは、これは御霊がこなければできない。男はすぐ権勢的で威張りたがる。また、女は嫉妬心をすぐ起こす。そういったような人間の悪い動きというのは、聖霊によってひっくり返され、焼きつくされていかないと、本当の赦し、本当の包みということは出てきません。御霊においてこそ、私たちは本当に敵を愛することができる。

どうか、皆さん、この聖霊の、御霊の大きな包みと大きな赦しの世界、これはキリストの十字架を本当に受けて御霊の貫きになってこそできる。どなたに対しても本当に胸襟を開くことができる。それはさっき言った、もはや無剣の世界です。本当の担いであり、本当の包みであり、本当の勝利だから、できるんです。それが無いのは、まだ自分の信仰にとらわれているからです。

「汝の信仰」とキリストが言った言葉が躓きにならないように。「汝の信仰」ということは、

「汝がいかに私を受けとったか。私を全的に受けとっているか」

ということですよ。また、こちらから言うよ、

「キリストさま、イエスさま。あなたの神に対するその信仰をいただきました」

ということ。

「賜りたる信心」

という言葉があるじゃないですか。これは親鸞の言葉です。賜りたる信心なんです、私たちの信仰というのは。キリストにぶつかって、キリストからいただいたところの、そっくりそのままというもの。それがこの中に内住して生きる。そして、

「どうか、このどうにもならない奴をあなたのものとしてください」

というのが、この「憫み給え」なんです。必ずあなたのものとしてくださる。私たちはキリストのものとして、キリストの証者と自ずからなっていく。

昔の侍たちさむらいのあの気魄を見ていると、非常に信仰の閃きがある。一番深い意味における、義を重んじている世界、大義が立っている世界です。大義大愛がもう本当に一つの世界です。小賢しい策略でも何でもない。そういう、今日の天気みたいに雲一点もなき世界に私たちは入れるんです。このデタラメと言ったらおかしいけれども、このガタガタな人間がですよ。だから、我々はこの福音が本当にありがたいわけです。



●キリストと一つとせられる

「うわぎを脱ぎ捨てて躍りあがって」

でつくわしたキリストに自分をぶちまけてみたら、キリストの憫みが全的にかかってきたから、この場合この盲人は直ちに眼が開いてしまった。皆さんの生活において、一人びとりを神さまがどのように救いあげ、またその人を通して栄光を顯したもうか。みんな特殊ですよ。決して、人真似の世界ではない。みな一人びとり、絶対に他とは比較することのできない路を歩かせられている。甲の人において現れる神さまの現れと、乙の人において現れる現れ方がまるで、その現象面をみると反対かも知れない。それでも、それは本当の世界なんです。

どうか、くだらない、そねみやうらやみ、そんなことはやめて——それでは本当の喜びと本当の生命の世界に、光の世界に入れないから。事実が証明するから——ひとつ行こうではないですか。ちつとも、遅いということはない。決して、遅いことはない。皆さん、これから、ぐんぐんその世界に入っていく。この福音書において、また使徒行伝において証しせられているような事態が、皆さんを通して、一人びとりを通して展開していく。

どうか、人間は自分を見たら弱くてしょうがないけれども、しかし、そんなことをもはや問題にすることはもうやめて、ただ主イエス・キリストだけを本当に相手にしていく。日々これに出会い、いかなる時もこの中に本当に入っていく。それが本当の祈りの世界なんです。そして、一つとなる。キリストと一つとせられる。確信ならざる確信が湧いてきますから。大丈夫です。イエスはいかなる事態に対しても、私たちをそれで、ダメにしない。

「^せ為んかた尽くれども、絶対に望みを失わず、倒されても滅びず」

とパウロが言った。何とまあ、素晴らしい生命だろう。あなた方は今、そうやって坐っているけれども、何かもう空中を飛んでいるような気持ではないですか。私はよく夢の中で空中を翔ぶんだけど、実に爽快だよ。両手を広げて、スーッと飛んでいく(笑)。これは何とも言えない。私は鳥が好きだものだから、時々そういう夢を見る。飛行機なんかいらん。夢だけで残念だけれどもね。

どうか、このバルテマイと同じように、本当に躍りあがって、また、さきほどの

「我を見よ」

との跛者と同じように。イザヤ書35章にあの素晴らしい喜びの音信があるとおri。イザヤは本当にそういった、もう既にキリストにおける恩寵の天国を夢みて語っているわけです。

もう、クリスチャンがくすぶるなんていうことは絶対にない。しかし、くすぶっている方もそこらにあるからです。そういう方がありましたら、どうか、慰め励まし、そして喜びの世界に入れてあげてください。私たちは本当にその証者となり、人たちをその中に入れる、もう存在即そういう使命です。まあ、楽しく行きましょう。

